

ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」

——美空ひばり 12 歳のハワイ公演をめぐって——

中原ゆかり

1. ハワイ日系音楽界と美空ひばり

美空ひばり（1937-1989）の人気は、ハワイにおいても絶大である。2018 年は、『ハワイ日系移民 150 周年記念 美空ひばり音楽祭（MISORA HIBARI MUSIC FESTIVAL: Commemorating the 150th Anniversary of the Arrival of Hawaii's First Japanese Immigrants）』がホノルルで 11 月 24 日に開催された。美空ひばりのフィルム・コンサートを中心に、ハワイアン歌手のメルヴェイン・リード Melveen Leed や、日本からも細川たかし、市川由紀乃、クリスタル・ケイが出演してのビッグ・イベントである¹⁾。

美空ひばりが最初にハワイに来たのは、彼女がまだ 12 歳だった 1950 年で、川田晴久（1927-1957）とともに約 1 カ月間島々を巡業した。子どもだったとはいえ、映画『悲しき口笛』（家城巳代治監督、美空ひばり主演）と同名の主題歌（藤浦洸作詞、万城目正作曲）が大ヒットして天才少女歌手といわれた翌年のハワイ巡業である。第二次大戦中にヨーロッパ戦で活躍した日系二世部隊の百大隊の招聘であり、百大隊会館（クラブハウス）を建設する基金の募金公演でもあるという、ハワイ日系にとって重要な公演でもあった。バック・バンドは、日系二世によるアマチュア楽団の「ハワイ松竹楽団」²⁾ だった。

美空は、その後も 1961 年、1969 年、1976 年にハワイ公演をおこなっている。プライベートでも、1982 年にはスタッフ全員をハワイ旅行に招待し、亡くなる前年にあたる 1988 年 1 月から 2 月にかけて約 1 カ月間、ハワイで休養したという³⁾。そして没後も 2007 年に「美空ひばりコンサート in ハワイ」のフィルム・コンサート、そして上述した 2018 年の美空ひばり音楽祭があった。

ハワイに美空ひばりのファンが多いのは、日本人の移民以来、日本のポピュラー音楽が愛好されてきたからである。愛好者が多いだけに、日本からハワイへ公演に来る芸能人も数多く、日系人自身によるアマチュア音楽活動も盛んである。現在のハワイの日系歌謡事情としては、大小様々な規模のカラオケ教室や、愛好家のグループがあり、ローマ字で書かれた歌詞をみながら熱心に日本語の歌を練習する人たちが数多くいる。また、大小のカラオケ・コンテストもあり、カラオケ教室の発表会、カラオケを主体としたパーティも盛んである。

例えば、筆者が 2018 年 11 月にでかけたワイキキのホテルでのパーティ⁴⁾ を例にあげると、朝 9 時からランチタイムをはさんで夕方 16 時まで、一人 1 曲もしくは 2 曲をうたうという方法で、1 番から 30 番までのプログラムが並んだ。選曲は大部分が演歌を中心とした日本の歌で、ところどころに日本民謡やアメリカのポピュラー・ソング、創作太鼓や獅子舞等のパフォーマンスも入る。ちなみにこの日にうたわれた美空ひばりのナンバーとしては「初恋マドロス」（西沢爽作詞、遠藤実作曲）、「りんご追分」（小沢不二夫作詞、米山正夫作曲）、「ある女の詩」（藤田ま

さと作詞、井上かつお作曲)等があった。出席者は、300名程である。

美空ひばりとの直接的な交流に関する個人の思い出も、様々に語られてきた。例えばハワイの日系歌謡界で活躍した関口愛子(1937-2014)は、筆者が2001年に会った時に、美空の思い出を語ってくれた⁵⁾。関口は、カラオケがはやる前の一時期、ホノルルでピアノ・バーのような店を経営しており、日本からの芸能人たちがよく立ち寄る店となっていた。美空ひばりも関口の店に来たことがあり、何曲かうたってお客さんをわかせる、最後に「ハワイの愛子をよろしくお願ひします」と言ってくれた。関口は、美空とは初対面でもあり、桁違いの偉い歌手と思っていたのに、こんなに気さくいい人なのかと驚いたという。そしてその後関口は、個人的な用事で東京へ行くことがあったが、美空ひばりには会えないだろうと思いこんで連絡もせずに行った。すると美空の方から関口が東京に来ているという噂をききつけてホテルを調べて会いに来てくれ、別れる時には涙を流してくれた。偉い人なのに誰にでも分け隔てない情のあつい人だと感激し、美空が亡くなった後も、時々思い出して周囲の人に話してきた。

関口は、大阪の松竹歌劇団出身で「トリオこいさんず」のメンバーとして津村愛子の名でデビューし、「イヤーかなわんわ」(岩谷時子作詞、宮川泰作曲)等のヒット曲を出している。1968年にグループ解散後、ハワイにわたってナイト・クラブで人気の歌手となり、その後自身の店をもった。カラオケの時代に入るとカラオケ教室の教師となって生徒たちに慕われ、亡くなる直前まで活動した。関口自身もハワイ日系音楽界で語り継がれる程の人物であり、彼女が折りにふれて語ってきた美空ひばりの思い出は、彼女と親しかった人たちの間で今なお話されている。美空ひばりは、ハワイにおいても伝説の歌姫となっているのである。

本稿でとりあげるのは、1950年に12歳の美空が川田とともに最初にハワイに来た時の逸話である。70年近くが過ぎようとしている今日、当時を覚えている人は、数少ない。幸い筆者は、2000年から2003年にかけて、戦後の二世楽団の関係者に会い、楽団の全盛期の活動についての話を伺っていた。1950年に美空ひばりが来た時の思い出を話してくれたのが、バック・バンドをつとめたハワイ松竹楽団のマネージャーだったマサジ・ウエハラ(1916-2006)⁶⁾と、ベースを担当していたテッド・シマブクロ(1925-)⁷⁾の二人である。12歳の美空との本番前のうちあわせで、ハワイ松竹楽団の指導者であったフランシス・ザナミが作曲した<別れの磯千鳥>をうたって欲しいと依頼し、一度だけ練習をした。するとたった一度の練習で美空は<別れの磯千鳥>を覚え、すぐにステージでうたっていた。小さな子どもがたった一度で<別れの磯千鳥>を覚えてうたったことに皆驚き、感激したという。この話は、2005年頃まで毎年行われていたハワイ松竹楽団の同窓会でもよく語られていた。

ハワイ松竹楽団が1950年代にバック・バンドをつとめたのは、美空ひばりだけではなく、月岡夢路と千秋、山口淑子、東海林太郎、美ち奴、田畑義夫、江利チエミといったピック・スターたちである。だが、それから約50年後、筆者がハワイ松竹楽団のメンバーへのインタビューをしていた時期に、彼らが積極的に語っていたのは、12歳の美空ひばりがうたった「別れの磯千鳥」の記憶だった。彼らにとってこの逸話は、なぜ特別なのだろうか。

以下本稿では、ハワイ松竹楽団にとっての「別れの磯千鳥」とはどのような歌なのか。また彼らがバック・バンドをつとめた1950年の美空ひばりの公演とはどのようなものだったのかをみていく。その上で、ハワイ松竹楽団のメンバーが12歳の美空の逸話をあえて語ってきた意味を検討したい。

2. ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」

「別れの磯千鳥」は、第二次世界大戦後にハワイで活躍したハワイ松竹楽団の指導者のフランシス・ザナミ (1914-1949)⁸⁾ が作曲した日本調歌謡曲である。メリー・テシマ (手島時子)⁹⁾ の歌でハワイ松竹楽団のレコードとして発売され¹⁰⁾ ハワイ日系社会の大ヒット曲となった。日系社会で大流行しただけに、多くのアマチュア二世歌手たちがこの歌をうたっており、オリジナル盤がメリー・テシマの歌であることを覚えている人は少ない。筆者が二世楽団の調査をすすめていた1990年代の末から2000年代の初めの頃には、誰か一人がこの歌をうたいたすと、周囲にいる二世や高齢の三世たちが皆一緒にうたいたして大合唱となっていた。



資料①「別れの磯千鳥」の音盤

フランシス・ザナミは、1914年、オアフ島生まれの沖縄系二世で、13歳から2年間、沖縄の親戚の家に預けられた。ハワイに戻り、ハイスクールに通っていた頃に、近くに住むトオル・ニシカワ (1906-1991)¹¹⁾ の影響でギターを習い、音楽に興味をもった。その当時は、のちに歌謡曲の作曲家となった服部逸郎 (レイモンド服部) がハワイに滞在して日本語学校の教師などをしながら二世たちと親しくつきあっており、ザナミも服部から作曲を習っている。1934年には沖縄系の音楽好きな友人を集めて「うるま楽団」を結成し、再編成して「スマイル楽団」となったが、大戦により解散した。戦後になると沖縄系・本土系の区別なく大きく組織して「ハワイ松竹楽団」をつくった。マネージャーのマサジ・ウエハラも沖縄系であり、ザナミとはうるま楽団、スマイル楽団、ハワイ松竹楽団をともにしている。

ハワイ松竹楽団の全盛期だった戦後の1946年から1949年は、ハワイ全島に少なくとも40以上の大小の二世楽団 (日系二世によるアマチュア楽団) があり、結婚式や日系のイベントで主に日本の歌謡曲を演奏していた。ハワイ松竹楽団はクラブ二世楽団と並んで楽団の規模も大きく、ホノルルを中心に他島へもかけてステージ・ショーをおこない、レコード制作もおこなった。第二次大戦以降、1948年までは日本からの芸能人がハワイを訪れなかったこともあり、ハワイ松竹楽団やクラブ二世楽団は日系社会のスター的な存在だったのである。またこの時期は、音楽に限らず、ハワイの日系文化が花ひらいた時代だった。大戦中に活躍した日系二世部隊の百大隊、四四二連隊の功績により、日系がアメリカ人として認められたからである。ザナミは、大戦中の日系二世部隊をたたえる「AJA行進曲」¹²⁾ や「愛しの出征」¹³⁾ 等を作曲してレコード

として発売し、なおかつその曲をとりいれた小歌劇をハワイ松竹楽団のステージ・ショーで上演した。特に1948年3月と11月のステージは満員御礼で、聴衆の要求にこたえて何日も上演が続くことになった¹⁴⁾。曲としての「別れの磯千鳥」の大ヒットもあり、ザナミは、ハワイ日系社会では人気絶頂のアマチュア作曲家、指導者であったのだ。



資料②ザナミの記念碑についての記事
"Hawaii Herald" 1950.5.13

しかしザナミは、1949年2月18日、34歳で急死した。翌19日にはハワイ松竹楽団をはじめとした二世楽団のメンバーが、彼が作曲した曲を演奏して音楽葬をおこなった¹⁵⁾。1年後の1950年2月19日には約700名が出席しての追悼演奏会を開催し¹⁶⁾、同年4月28日から30日まではハワイ松竹楽団がザナミの音楽碑を建立するためのステージ・ショーを開催した¹⁷⁾。それからまもない5月14日、12歳の美空ひばりと川田晴久がハワイに到着し、ハワイ松竹楽団がバック・バンドをつとめたのである。上述したウエハラやシマブクロの語りのおり、既に大スターだった美空が、たった1回の練習で「別れの磯千鳥」をうたったとしたら、「別れの磯千鳥」に対する思いと、美空の天才ぶりに対する驚きとがいりまじり、彼らの感激は相当なものだったことだろうと推測できる。

そして1952年、「別れの磯千鳥」は日本にもたらされて近江俊郎の歌でヒットした¹⁸⁾。ハワイ日系だけのローカルな歌ではなく、日本の歌手がうたってヒットするというメジャーな曲になったのである。その後は井上ひろし、日野てる子、エセル中田、美空ひばり等の数多くの歌手が「別れの磯千鳥」をシングルやアルバムにおさめている¹⁹⁾。いっぽうハワイ松竹楽団は、1950年代に日本からの歌手のバック・バンドをつとめた後、1960年代には数名のメンバーだけが週末の結婚式などで演奏し、1970年代には姿を消した。だがハワイ松竹楽団のメンバーにとって「別れの磯千鳥」は、楽団のテーマ・ソングのようなものであり、二世たちにとっても「ハワイ日系が作曲した特別な歌」である。日本の歌手がうたってヒットしたことも、数多くの日本の歌手たちがうたっていることも、ハワイ松竹楽団のメンバーをはじめとした二世たちの誇りであったはずだ。

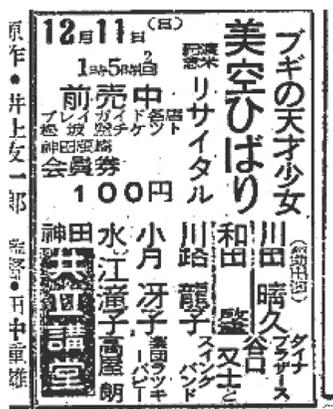
しかしこの歌の作詞者については謎が多い。近江俊郎の歌でヒットした1952年当時、作詞者の福山たか子は行方不明であった。筆者が二世たちからきいた話では、作詞者の福山たか子は、

ザナミが戦前、日本に滞在した時のガールフレンドで、開戦前の最後の船でハワイへ帰ろうとするザナミへの別れの気持ちを詩にたくして渡したという。ザナミは船の中でその詩に曲をつけ、ハワイに着いた時には「別れの磯千鳥」の楽譜を手に船を降りてきたという逸話も語られていた。また福山たか子は、戦争中に空襲で亡くなったという話もあった。いずれにしても二世たちの中に、福山たか子を直接知る人はいない。ハワイ松竹のレコードを制作する時に、福山たか子の名を作詞者として記した、亡きザナミだけが福山たか子を知っていたはずなのである²⁰⁾。そう考えると、多くの二世たちは、「別れの磯千鳥」についての伝説を生成してきたのではないかと思えてくる。そして伝説を生んだのは、多くの二世たちの「別れの磯千鳥」に対する思いの強さなのである。

3. 美空ひばり 12 歳のハワイ公演

ハワイ松竹楽団が1950年にバック・バンドをつとめた、12歳の美空ひばりのハワイ公演についてみていこう。12歳の美空ひばりと母の加藤喜美枝、川田晴久は、まだ日本がGHQの占領下だった1950年5月16日朝、羽田を発ち、ハワイ時間の16日朝、ホノルルに到着した。既に前年の「悲しき口笛」がハワイでも人気となっており、100名以上のファンが出迎え、オープンカー15台での行進となった。第二次世界大戦中に活躍した日系二世による百大隊の招聘で、なおかつ百大隊会館の建設基金の募金公演でもあった。美空と母の加藤、川田の3人は百大隊の墓に詣で、ハワイの興行中は百大隊の退役軍人がずっと付き添って面倒をみた。ハワイ各地でほぼ毎晩公演をおこない、連日満員の大歓迎を受けている²¹⁾。美空はハワイ滞在中に13歳の誕生日を迎え、映画『東京キッド』(斎藤寅次郎監督)のロケもあり、過密なスケジュールであった。そして6月20日にホノルルをでてアメリカ西海岸を巡業し、7月20日にサンフランシスコからハワイ経由で帰国した。

終戦後5年がたってはいたが、美空の渡米は、日本の芸能界でも大きな話題であり、渡米前の1949年12月11日、神田の共立講堂で「美空ひばり渡米記念リサイタル」を開いている²²⁾。



資料③渡米記念リサイタルの広告
読売新聞 1949.12.4.

しかし、作曲家の服部良一が、自身の全作品を美空が渡米中にうたうことを禁止する旨を著作権協会を通じて通告した。1950年5月16日の『読売新聞』には、「ヴギは歌えぬ美空ひばり：服部良一氏が作品の使用を禁止」と見出しがでている。美空は渡米の前年にメジャー・デビューして映画にも出演し、「河童ブギ」や「悲しき口笛」がヒットしていたとはいえ、自身の持ち歌はまだ少なかった。デビュー前から「ベビー笠置」と呼ばれるほどに笠置シズ子の持ち歌、つまり服部良一の作曲によるブギをうたって「ブギの天才少女」とも呼ばれてきた。

記事によれば、近く笠置も渡米することになっており、笠置のモノマネが先に渡米してうたわれると、笠置の方が「架空の大人版」といわれることを危惧しているとのことである。実際、服部と笠置は同年6月16日にハワイ入りしている。ちなみに1950年は日本からハワイに続々と芸能人が訪れた年であり、歌謡曲の歌手や作曲家に限ってみても、美空と川田、笠置と服部の他に、山口淑子、古賀政男、二葉あき子、市丸、霧島昇、佐藤けい子、小唄勝太郎、渡辺はま子、暁テル子、榎本美佐江、月丘夢路、月丘千秋、あきれたボーイズの山茶花究、増田喜頓、防屋三郎等である²³⁾。

美空の自伝によれば、服部が美空にブギをうたうことを禁止した話は、渡航前にハワイでも報じられており「東京ブギはやらないのか」と百大隊のメンバーに尋ねられた。ブギ以外のものので番組をつくと答えたところ、日本ではそうでもハワイは別だと、百大隊からの証明書を発行してくれた。こうして美空はハワイでもブギをうたえることになったが、美空によればなるべくうたわないように心がけたという²⁴⁾。

ハワイでの公演関連の日程について、『川田晴久と美空ひばり』（橋本、岡村 2003）と『ハワイ・タイムス』1950年5月から6月の記事をもとに整理すると、次のようになる。

5月1日：『ハワイ・タイムス』紙上で美空ひばりのそっくりさん募集（8歳—13歳）

5月15日：ハワイのそっくりさん、バーバラ・サツキ・イワナガ（11歳、フラの名人）に決定

5月16日：美空、美空の母、川田の3人がホノルル空港到着。百大隊の墓へ。

バックバンドのハワイ松竹楽団と練習。

5月17日、18日、19日：ホノルルのシビック公会堂にて。

『悲しき口笛』の上映。百大隊代表の挨拶。美空、川田の公演。

5月20日、21日、22日：日延べ（追加公演）。マッキンレー・ハイ・スクールの講堂にて。

『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。1日目の公演のオープニングは、ハワイ松竹楽団の「AJA行進曲」。「ハワイの美空ひばり」ことそっくりさんのバーバラ・イワナガが登場して、会場は沸き、舞台上でイワナガがフラを踊った。アンコールではイワナガはフラを踊り、美空は「ボタンとリボン」の英語版をうたった。

5月23日：ワイアルアの古閑劇場にて。『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。

5月25日：ワヒアアの十三リプレイスメントデポーにて。『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。

5月26日、27日：カワナナコア講堂、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。

5月28日：10時から12時まで。カピオラニ公園音楽堂（一般招待デー、無料）。子どもたちによる歌や踊りのプログラム。中間の11時頃に百大隊代表の挨拶があり、美空と川田の歌。

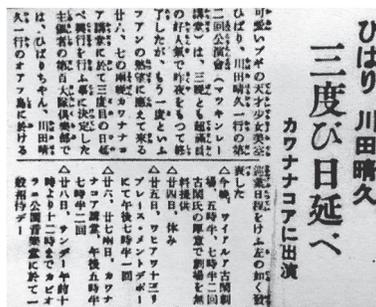
5月28日：19時30分より。ワヒアアの十三リプレイスメントラポーにて。『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。

ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」(中原)

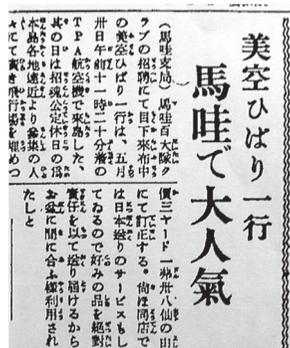
- 5月30日：マウイ島へ移動。日米キネマ木村宗雄の引率にて、松竹弦楽団一行同伴。百大隊の墓へ。ワイルクのキング劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空と川田の公演。
- 5月31日：パイアのプリンセス劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月1日：ラハイナのクイン劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月2日：ハワイ島へ移動。コナ劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月3日：ホノカア劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月5日6日：ヒロ市マモ劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月7日：日延べ(追加公演)。ヒロ・ハイ講堂にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月9日：カウアイ島、ハナベペのアロハ劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月10日：リフエのローヤル劇場にて、『悲しき口笛』の上映。美空、川田の公演。
- 6月12日：オアフ島に移動。ホノルルに戻る。
- 6月13日14日：お名残り興行。カワナナナ講堂にて。松竹映画『奴の銀平』の上映。美空、川田の公演。百大隊クラブから美空、美空の母、川田の3人に記念品贈呈。
- 6月16日17日18日：『東京キッド』のロケ。
- 6月20日：ホノルル空港から米本土へ移動。西海岸各地で公演。
- 7月19日：サンフランシスコ空港からハワイ経由で日本へ。
ホノルル空港には百大隊クラブのメンバーが会いに来た。

以上が、ハワイでの美空、川田の公演の日程である。つまり5月29日まではオアフ島、30日から6月1日まではマウイ島、6月2日から7日(もしくは8日)まではハワイ島、6月9日(もしくは8日)から6月11日までがカウアイ島、6月12日にオアフ島に戻り、20日に米本土へ。そして7月19日、米本土からハワイ経由で日本に帰国している。

記事をみていくと、上記の公演の他にも、歓迎会があり、百大隊のメンバーの家に招かれたり、デパートに案内されたりと、ハードスケジュールでありながら、様々なもてなしを受けている様子が伺える。川田の日記にも、「1950・May 19th …国久氏と吉岡氏の処へ行き、12:00just、ワイキキの海の見へるローヤル・ハワイホテルへ食事に行く。豪華なものである。…サングラスを買って貰ふ。…夜はまた凄い入りだ。大騒ぎと成り五千人は居るだろう。国久氏 100club の人達の気持ちが初めて解り、うれしかった。…」(橋本、岡村 2003,123) とある。



資料④公演の人気を伝える記事
Hawaii Times 1950.5.23.



資料⑤マウイ島の公演での人気を伝える記事
Hawaii Times 1950.6.1.

美空と川田の公演についての『ハワイ・タイムス』の記事では、「大人気」「大入満員」「日延べ」（追加公演があること）が連日のように報じられ、5月28日のカピオラニ公園音楽堂では、見物人二万人、身動きできないほどで卒倒する人や迷子も十数人という賑わいだったようである。

ハワイ松竹楽団に関する記述を探すと、ハワイに着いたその晩に練習をしたとある²⁵⁾。記事のすべてにバック・バンド名が書かれているわけではないが、おそらく5月28日のカピオラニ公園音楽堂でのバンドがハワイ少女楽団であったことを除けば、オアフ島での公演のすべてがハワイ松竹楽団であったと考えてよいだろう。またマウイ島への巡業にもハワイ松竹楽団が同伴したと書かれており²⁶⁾少なくとも5月30日から6月1日までのマウイ島での公演はハワイ松竹楽団の伴奏であったと考えられる。その後のハワイ島、カウアイ島への巡業について楽団の名は特に記されていないが、ハワイ松竹楽団であった可能性が高い。そして最後の6月13日14日の「お名残り興行」についての記事には伴奏がハワイ松竹楽団であることがはっきりと書かれている。

公演中、美空がうたった曲名について、記事に掲載されているものをあげると、「悲しき口笛」、「河童ブギウギ」（藤浦洗作詞，浅井拳嘩作曲）、「星の流れに」（清水みのる作詞，利根一郎作曲）、「涙の紅バラ」（奥野椰子夫作詩，仁木他喜雄作曲）、「港シャンソン」（内田つとむ作詞，上原げんと作曲）、「ブギにうかれて」（藤浦洗作詞，田代与志作曲）、「ヘイヘイブギー」（藤浦洗作詞，服部良一作曲）、「三味線ブギウギ」（佐伯孝夫作詞，服部良一作曲）、「浪曲入り観音経（唄入り観音経）」（作詞者作曲者不詳）、「ボタンとりボン Buttons and Bows」（J.Livingston, R.B.Evans），である。記事に出てくる服部良一の曲は、「ヘイヘイブギー」と「三味線ブギウギ」の2曲のみである。また『ハワイ・タイムス』の5月19日の記事には、「可愛い美空ひばり三味線ブギを唄ふ」の見出しのもとに、「…昨夜も初日に劣らず大入り満員，素晴らしい人気を博したが，特に木村宗雄氏の厚意で美空ひばりちゃんが『三味線ブギ』を唄ひ拍手喝采を博した」とあり，川田がギターを弾く横に美空が立ってうたう写真が掲載されている。服部良一が自分の曲をうたうことを禁止したという事の次第をハワイの聴衆は知っており，なおかつ美空の「三味線ブギウギ」を聴きたいと思っていたところ，木村がうたえるようにという証明書を出したということだと思われる。『ハワイ・タイムス』の記事に，美空がうたった曲をすべて記しているとは言い難いが，美空は服部良一の曲をなるべくうたわないようにしたというのは，どうやら事実

のようだ。

記事には演奏方法についての記述はなく、録音資料も今のところは確認されていない。だが美空、川田がハワイに続いて米本土へ行き、サクラメントでおこなった公演については録音が残っている²⁷⁾。その録音では「三味線ブギウギ」「唄入り観音経」「ボタンとりボン」は、川田のギター伴奏であり、ハワイでも同様であったと推測できる。バックバンドが担当したのはその他の曲であろう。

また『ハワイ・タイムス』に記された曲の中で、ハワイ松竹楽団のオリジナル曲が記されているのは、5月20日マッキンレー・ハイスクールの講堂での、オープニングの「AJA行進曲」のみであり、そのあとに美空の歌が続いている。つまり、大部分の公演のバック・バンドがハワイ松竹楽団であることは確かだが、「別れの磯千鳥」を美空がうたったとは記事にはどこにも書かれていないのである。だがウエハラやシマブクロがいうように、本番前の練習で依頼したなら、プログラム等にも書かれていなかったはずであり、記者がプログラムを参考に記事を書いたとしたら、書いてなくて当然であろう。あるいは記者が公演を聴いていたとしても、「別れの磯千鳥」を美空がうたったことは、特別に書き記すほどのことではなかったのだろうか。この時点では、「別れの磯千鳥」は大ヒット曲だったとはいえ、ハワイ日系という狭い社会だけのローカルの曲として評価されていたはずだ。ましてやヒット曲とは流行歌であり、少し前の流行歌よりも現在の流行歌、つまり美空の得意な歌を聴きたいと思うのが一般的な大衆の心理であろう。ならば同じようにハワイ日系だけが知り過去の曲となった「AJA行進曲」は、なぜ記事に記されているのかという疑問がわく。おそらく百大隊主催の会館建設基金募集のための公演であったため、二世部隊に関連する「AJA行進曲」をオープニングで演奏し、プログラムにも記載されて、なおかつ記事として記されたのであろう。美空が「別れの磯千鳥」をうたったとしても、それで特別に感激したのは、本番前の一度の練習だけであることを知っており、なおかつ亡きザナミの作曲したハワイ松竹楽団の曲であるという思いの強い、ハワイ松竹のバックバンドのメンバーだけだったということになる。

ともあれ、川田にしても、美空にしても、ハワイ公演でハワイをすっかり気に入ったらしい。ハワイ公演のあとの米本土の公演を終え、帰国途中でハワイを経由した7月19日の川田の日記には、「…ハワイがみえてきた。…一カ月の旅でもどったハワイ。100clubの人達も皆居てくれる。全く第二の国へ帰ったような思いがする」²⁸⁾とある。美空も自伝の中で、「こどもごころにも“ハワイって素敵なところ、大きくなってお嫁さんに行き、こんなところへ新婚旅行に来たら素晴らしいだろうな”などと一人で考えたんですから…」²⁹⁾と記している。

渡米公演を終えた美空、川田の帰国を、『読売新聞』は1950年7月25日、「渡米の“かせぎ頭”美空ひばり、川田晴久と帰る」の見出しで報じている。そしてハワイロケの入った『東京キッド』は大ヒットとなった。

百大隊のメンバーは、ハワイ公演をきっかけに、美空や川田と連絡をとり、日本やハワイでつきあいが続いていた。川田は、百大隊の会館建設に尽力したということで、名誉隊員となっている³⁰⁾。

4. おわりに

1950年に美空、川田がハワイで公演をおこなった当時の観客は、大部分が日系一世、二世であった。12歳の美空のステージを聴いたハワイの観客なら、当時天才少女と呼ばれていた美空ひばりが、日本の歌謡界の女王といわれるほどの大物歌手となっていく様子を、数々のヒット曲とともにみていたはずだ。子どもの頃を知っている歌手、ましてや戦後ようやく日本からの歌手が来るようになった時期のハワイ公演を記憶していればなおさら、美空ひばりの活躍を嬉しく思う人も多かっただろう。特にハワイ松竹楽団のメンバーは、美空と川田のステージのバックで演奏しながら、聴衆の割れるような拍手をステージの上で受けたわけである。美空のその後の活躍を、彼らが特別な気持ちでみていたことは容易に想像できる。

ハワイ日系社会で人気の歌謡曲といえば常に日本製のものであり、日系が作曲した曲がヒットしたのは今日に至るまで「別れの磯千鳥」一曲のみである。「別れの磯千鳥」は、12歳の美空ひばりがハワイで公演した時は、ハワイ日系だけのローカルなヒット曲であったが、1952年に近江俊郎の歌でヒットして日本全国でメジャーな曲となった。それ以降、さらに数多くの歌手たちがシングルやLPにこの曲を吹き込み、美空ひばりも近江俊郎のあとにうたうようになった歌手として吹き込んでいる。

ハワイ松竹楽団のメンバーにとって「別れの磯千鳥」は、若い頃にハワイ日系社会で大人気だった楽団での様々な経験やザナミの思い出とともに、大切な曲である。その曲を最初にうたった日本の歌手が、彼らとは直接縁のない近江俊郎ではなく、12歳の美空ひばりであることは、彼らにとって重要なことであろう。

12歳の美空ひばりが本番前のたった一度の練習で「別れの磯千鳥」をステージでうたったという、ハワイ松竹楽団のメンバーたちの記憶を語りつぐ人は、おそらくもういないだろう。また彼らの記憶を裏付ける客観的な証拠は、今のところはない。しかし、たとえそれが、いつのまにか創られた伝説だったとしても、彼らの「別れの磯千鳥」に対する思いも、美空に対する思いも、変わることはない。

<謝辞>

本稿は、筆者が1997年から2018年にかけて、ハワイで日本の歌が好きな方たちとおつきあいをしながら、お話を伺うことによって書いたものです。貴重な記憶を提供してくださった方々、そしてハワイで歌を愛するすべての方たちに、感謝の気持ちを捧げます。

<註>

- 1) 主催：美空ひばりプロダクション・ハワイ日米協会、協力：日本コロムビア株式会社、協賛：株式会社エスプリライン、後援：外務省。なお、ホノルルに続いて11月28日にはハワイ島のパレスシアターでも、フィルムコンサートのみの上映があった。
- 2) 二世楽団のそれぞれの名称については、例えばハワイ松竹楽団の場合、英語ではHawaii Shochiku Orchestraだが、プログラムや音盤、歌詞カードや日本語新聞に記された日本語表記としては「ハワイ松竹楽団」、「ハワイ松竹音楽団」、「ハワイ松竹弦楽団」、「ハワイ松竹オーケストラ」等と表記され、「ハワイ」を「布哇」と書いたものもあり、統一されていない。ここでの「オーケストラ」とは、ジャズの

ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」(中原)

ビッグ・バンドに用いる名称だが、日本語でいうオーケストラという名称は、一般的にはクラシックの交響楽団というイメージが強い。誤解を避けるために、筆者は通常、「ハワイ松竹楽団」の名称を使用している。

- 3) 「美空ひばり公式ウェブサイト」より
- 4) 2018年11月11日(日)、ワイキキのアロヒラニ・リゾート・ホテルで開催された、「ひまわり歌祭り 2018 HIMAWARI & Guest」。
- 5) 関口愛子へのインタビューは、2001年8月23日におこない、その後教室の様子を見学し、発表会にも招待していただいた。
- 6) 日本語のステージネームは上原正次。筆者によるインタビューは2000年7月23日から数回にわたっておこない、その後も何度かハワイ松竹楽団のもとメンバーたちとともに食事をする機会などがあつた。
- 7) 日本語のステージネームは、テッド島袋、島袋金三郎。筆者によるインタビューは2000年8月12日が最初で、その後も何度もお話を伺う機会があつた。テッド・シマブクロは、最初は歌手としてハワイ松竹楽団に入り、「ハワイのナット・キング・コール Nat King Cole」とまで呼ばれた甘い声で人気となった。特にハワイ日系社会で戦前から人気の上原敏の持ち歌だった「好いていたのに」(渋谷白渥作詞作曲、細田定雄編曲)をシング・アレンジでうたったハワイ松竹楽団のレコードが日系の間では人気である(Tropic 121-A)。またシマブクロは、ハワイ松竹楽団に入るとすぐに、ベースの弾き方や楽譜の読み方を習得しており、美空ひばりのバック・バンドにもベースで参加した。ちなみにテッド・シマブクロの弟のジョージ・シマブクロ(ジョージ島袋)は、「クラブ二世楽団」の歌手として活躍したのち、日本にわたってデビューし、「ジャパニーズ・ルムバ」(J Miller 作詞作曲、服部レイモンド編曲)がヒットした。その後はハワイに戻り、日本語と英語が堪能でMCもできる歌手として活躍した。
- 8) 本名はフランシス・ザハ、日本語のステージ・ネームはフランシス座波。
- 9) 日本語によるステージネームの表記は、手島時子、手嶋時子、メリー手島など。
- 10) Bell Records in Hawaii LKS-175
- 11) ハワイ日系で最初の二世楽団といわれる「日本楽団」の指導者でハーモニカ教室等も開いていた。筆者がハワイへ行った時は既に故人となっていたが、息子さんのアルバート・ニシカワさんに2001年8月17日にお話をおききすることができた。
- 12) 本田緑川作詞、フランシス座波作曲、高岡直幸の歌。レコードは Bell Records in Hawaii LKS-287。なお「フランシス座波」は音盤上の表記。
- 13) 本田緑川作詞、フランシス座波作曲、古川千代美の歌。レコードは、Bell Records in Hawaii LKS-285。なお「フランシス座波」は音盤上の表記。
- 14) 本田(1956,112),『ハワイ・タイムス』1948年11月20日,23日
- 15) 『ハワイ・タイムス』1949年2月19日
- 16) 『ハワイ・タイムス』1950年2月20日
- 17) 『ハワイ・タイムス』1950年4月24日,『ハワイ・ヘラルド』1950年5月13日
- 18) Columbia A1342A
- 19) 2019年1月10日の時点で、「別れの磯千鳥」のレコード、CDを制作して著作権登録をしているアーティストは、JASRACによれば、つぎの31件である。近江俊郎、山口銀次とルアナ・タヒチアンズ、石原裕次郎、井上ひろし、クラウンオーケストラ、山口軍一&ルアナ・ハワイアンズ・ウィズ・オールスターズ、美空ひばり、倍賞千恵子、エセル中田、日野てる子、大月みやこ、バックキー白方とアロハ・ハワイアンズ、大石昌美、ノガミキミコ、OHIO PLAYERS, SAM TAYLOR & HIS ORCHESTRA, アイ・ジョージ、夢慧、SAM TAYLOR, 木村好夫、RENE PAULO, エセル中田&バックキー白方とアロハ・ハワイアンズ、アントニオ古賀、SANDII, バックキー白片、北島三郎、山本丈晴、デューク・エイセス、鶴岡雅義、三島敏夫、緑川アコ。
- 20) 作詞者は福山たか子ではなく、別の人物だという説もある(南條1986)。

- 21) 川田の日記によれば、客が少なかったのは6月10日のみ。「今日はshow客少ない…帰りに盆踊り見る。」とある(橋本, 岡村 2003, 126)。筆者の推測では、盆踊りという日系コミュニティで最大の行事と、公演の日程がかさなったことが原因ではないかと思う。
- 22) 読売新聞 1949年12月4日
- 23) 恒文社 21 編集部編 (2001,57-76)
- 24) 美空 (2012,75-79)
- 25) 橋本, 岡村 2003,22-23. 橋本, 岡村 (2003) は、「ハワイ松竹オーケストラ」の名称を使用している。また『ハワイ・タイムス』の英語版では Hawaii Shochiku Orchestra, 日本語版では、「布哇松竹オーケストラ」「布哇松竹」「布哇松竹弦楽団」「布哇松竹弦楽団」「布哇松竹音楽団」などと書かれている。(2) 参照。
- 26) 『ハワイ・タイムス』1950年6月1日
- 27) 『美空ひばり & 川田晴久 in アメリカ 1950 HIBARI & KAWADA in America 1950』(2013) 日本コロムビア, CD.
- 28) 橋本, 岡村 2003,132
- 29) 美空 2012,79
- 30) 橋本, 岡村 2003,124-125

<参考文献>

恒文社 21 編集部編

2001 『憧れのハワイ航路』恒文社

中原ゆかり

2014 『ハワイに響くニッポンの歌：ホレホレ節から懐メロ・ブームまで』人文書院

2016 「音盤は時代をつなぐーハワイ二世楽団のレコードと復刻 CD」, 河原典文・日比嘉高編 『メディアー移民をつなぐ, 移民がつなぐ』, クロスカルチャー出版

Nakahara, Yukari

2018 “Musical Histories of Nisei Singers, Featuring Chiyoko Ida Aoyagi of the Hawaii Shochiku Orchestra.” *The bulletin of the Faculty of Law and Letters, Humanities, Ehime University.* (44) 49-70

南條岳彦

1986 『歌は波間によみがえれ』講談社

橋本治, 岡村和恵(文)

2003 『川田晴久と美空ひばり：アメリカ公演』中央公論社

本田緑川

1956 『電車日誌を語る』私家版

美空ひばり

2012 『虹の唄』日本図書センター

<参考 URL >

美空ひばり 公式ウェブサイト

<http://www.misorahibari.com/> (2019年1月1日閲覧)

美空ひばり 日本コロムビアオフィシャルサイト

<https://columbia.jp/artist-info/hibari/> (2019年1月1日閲覧)

GANNENMONO CELEBRATING 150 YEARS

ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」(中原)

<https://kizunahawaii.org/> (2019年1月1日閲覧)

OK Music News

<https://okmusic.jp/news/307248> (2019年1月1日閲覧)

<映像音響資料>

『悲しき口笛』家城巳代治監督，竹田敏彦原作，清島長利脚本，松竹ビデオ事業室，2005 (c1949)，美空ひばりメモリアル DVD-Box;7.

『東京キッド』斎藤寅次郎監督，長瀬喜伴原作，松竹ビデオ事業室，2005 (c1950)，美空ひばりメモリアル DVD-Box;8.

『美空ひばり & 川田晴久 in アメリカ 1950 HIBARI & KAWADA in America 1950』(2013) 日本コロムビア，CD.

